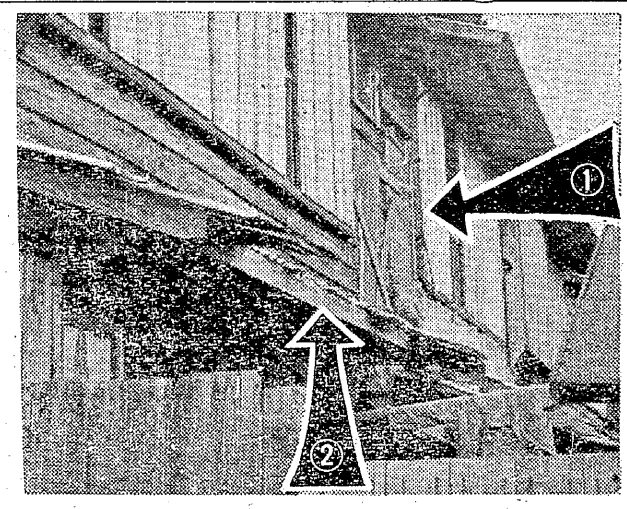
家の修理早く頼む

一主婦から組合へ投書

組合の皆さん毎日ご苦労さまです。秋もなかばとなり、寒い冬がいよいよ近まりました。冬が近まつて心配していますのは家屋の修理のことです。先日の台風で瓦が飛んだり、堀が倒れたり壁がくずれたりしましたとき、組合の力ですぐさま修理をされましたことには非常に感謝しております。

しかし被害が多かつたためか修理が出来ましたところは、早く出来ておりますがまだ修理がしていないところもあるように聞いております。私のところも屋根はすぐ修理してもらいましたが、塀や壁はいつ修理してもらえるのかいつまで待つても何の沙汰もありません主人が勤務を休んで応急処理はしましたが、雨風の日は何のたしにもならず全く困つています。どうかならないものでしようか。冬がくればどうしようかと毎晩心配しています。私の知つているところでもまだ修理がこないと心配しているところが四、五軒あります。どうか一日も早く修理して下さるようお願いいたします。

四山社宅一主婦（投書）



(1)は崩れ落ちた壁　(2)破れたままの庇

修理を確約

この投書にもとずき、編集部では早速現場写真をとるとともに厚生部に問合せた。

厚生部長談

さきごろ組合員の中から台風後の屋根瓦の問題でテンプラ工事や応急的な修理をなしているという批判があつたので、これに対しては会社に厳重な申入れをするとともに、検収制度を明確にした。

なお、まだ台風後の修理がなされていないところについては、工事を急がせる確約をしております。いろいろ手がつけられていないところは、それぞれの支部の厚生部に申入れて修理の促進をはかつてもらいたい。

連絡員制を闘いとる

明朗職場めざす港務保線分会

港務支部保線分会（約八十名）ではいままで作業系体の中に責任者制度というものがあり、職場の中に暗い影を投げかけて、職場民主化の大きなガンとなつていたが、組合員の自覚めとともに、漸くこれに対する排止への動きがここ数年来たい頭してきた。職場分会の統制とれた団結の力はついにこの職場の廃設めざし、勇しく歩みだしている。

暗影なげる責任者制

そもそもこの責任者制度なるものは戦前から保線の職場に厳として実施されていた。以前は職場が十カ所ぐらいに分れていたが、戦後二十三年ごろ現在の四カ所（港、方田、唐浦、浜）になつた。十カ所に分れていた時代はいまの責任者を帳場頭と呼び、この人を責任者とするのが会社の方針だつた。ところが四カ所に統合された当時に、係長は「責任者だとは認めていない」と言明していた。それが現在までズルズルと責任者制度として尾を引いて係員代行という考えになつていた。このため職制を通じて責任者に作業命令がくればいやでも心でも同じ組合員に言いつけて作業をさせねばならず、両者の板ばさみとなり苦しんでいた組合意識が強まるにつれて、この制度への非難が次第に高まり、ついに去る二月四カ所合同職場常会を開催した席で、責任者の方からこの廃止が叫ばれ、常会でもこれを決定した。

分会案を敢行

たまたまこのとき春闘に突入、組合は到達闘争の職場闘争へと発展して大闘争になり、この責任者問題も一時保留となつてしまつた。

その後九月に入り再燃し正式に係長と交渉したが、係長は「従来通りで行う」と答弁、分会では会社が認めていないのを従来通り行うのはおかしいと鋭く追及したが、結局物別れに終つた。

分会では九月二十九日合同職場常会を開き、会社の認めていない責任者であるなら、われわれ独自でやると責任者制の代りに連絡員制を決定して十月一日から決行することにきめた。

この連絡員制は以前から再三要求していたものであつた。このため十月一日からは毎朝繰込のさい責任者を指命されたがこれを拒否して連絡員で作業を遂行した。これが三日までつづいたが港分会だけは三日に職場常会を開き係長と交渉を行い、毎朝のイザコザを解決しようとはかつた。

毎晩交渉續く

この交渉席上係長は従来のを続行してくれと談らなかつた。結局課長を話合つて解答することになり課長を呼ぶために待機したが、行方が知れずつめかけた分会員三十二名は徹宵も覚悟で交渉の成行きを見守つた。午前一時半になつても課長がこないためついに執行部のあつせんで小委員会を持ち、分会からの案として「繰込が終つた後に連絡員をみんなから選んでこれを係員が指示する。作業上疑義あるときは係員と話合つて変更する」という暫定措置でこれを五日まで続けることで話合いがなつた。漸く五日になり係長からの答弁を求めたところ、何ら進展する気配もなく、暫定措置を続行してくれとのことで分会員の反感を買うばかりで物別れに終つてしまつた。

以降翌日の八日も交渉を毎晩おそくまでもつたがラチがあかず。ついに九日に課長の交渉へと移行した。

分会員と委員のたゆまざる努力と精力的なねばりはついに交渉を有利に導き、連絡員は皆が選出してその職務もほんとうの連絡だけにするということが決定した最初はどうなるものかと思われていたこの交渉も、回数を増すごとに強まつた分会のスクラムがこの成果を挙げたものとして、分会員間に大きな自信をあたえるとともに各職場からも注目されている。

写真説明
保線分会のセメント作業

兼行奠

ヤマの自慢長距離走者

このところ三池が誇るホープだろう。四山鉱本線修理が彼の仕事、スポーツ熱はますます上昇するばかりで、止まるところを知らないのではないかと思われる程の中になつてきた。地域でも職場でもこの例にはもれないようだ。なかんずくマラソン、野球などがその筆頭だろう去る七日行われた三山陸上競技大会で三池は輝く勝利をかざめたが、五千メートルに兼行氏は一五分四三秒〇の大会新記録をうち立てている。

マラソンときけば四山の兼行というように余りにも有名であるので、ことさらここに彼の記録などを多く触れる点はあるまい。この点ではまさに三池が誇るホープ、四山鉱本線修理が彼の仕事、二十五才、まだまだこれからというところ、新しい記録を目指して毎日これにいどんでいる。

スポーツマンにしては温和しい人物で、地域でも至つて評判のよい明朗な青年で通つており、このためか最近地域の人たちの間に、なんとかして地域表彰を行いたいという声が起つているほどで、これをみても一応彼の人となりは察しられるだろう。スポーツ一本槍で邁進しているが、組合関係の行事などにも表面にこそ出ないが進んで参加しているスポーツマンらしからぬ地味な性格であり、自分で考えたことを実行に移す意思の力は強いものを持つている。無口だが好感が持てるのも彼の強味だろう。

自分の記録にいどむ精進ぶりは敬服するぐらいの強さで、彼が毎日通勤している平井から四山鉱まで（約二里）朝も帰りも、かけ足で走り通しているというのでも彼の精進ぶりがうかがわれる。この半面、自分の身体には常人以上の注意をはらつており、いよいよマラソンシーズンの到来が近まり彼の活躍がさらに今年も期待されている。今後の健斗を祈る。

一口解説

先日姪が死亡しましたが、忌引休暇の有無が判りませんでした。忌引休暇をくわしく説明して下さい。

港務　M生

会社ととりきめている忌引休暇はつぎの通りです。

父母、養父母、配偶者、子の場合……七日間。

祖父母、兄弟姉妹、配偶者の父母孫、子の配偶者の場合……四日間

三親等の血族、配偶者の兄弟姉妹または兄弟姉妹の配偶の場合……二日間。

以上の日数には公休日を含みません。

高瀬保育所に家族慰労のため入湯しようと思いますが、入湯手続や、宿泊料金を説明して下さい。

四山　中島

手続は各坑所人事の保健課に申込んで下さい。

宿泊の場合は料金二百円。ただし昭和三十一年十一月一日より地方税法第六一九条にもとづき入湯税が一日十円課せられることになりました。宿泊の場合は当日と翌日にまたがりますので入湯税が二十円課せられます。

会長に川口氏（圧東）

第三回大地評大会終る

大地評第三回定期大会は十月六日午前九時から労働会館に代議員三百五十名が集まつて開かれた。議長団に教組遠矢委員長、三鉱山田教官部長、東圧猿渡委員長、自労国崎書記長を選出、細谷大牟田市長、県総評、久留米地評、熊本県総評などのメッセージ発表ののち鴻田事務局長が昨年一年間の経過を報告、午後から小宮会長が運動方針案を提案、約三時間にわたつて活発な論議を行い

(1)スト規制法、労働三法改悪反対

(2)賃金すえ置の労働時間短縮

(3)最低賃金八千円の確立

などの七項目のスローガンを採択国鉄の運賃値上げ反対、三菱五郎丸委員の法廷闘争支援の緊急動議を採択、役員の改選を行つた。

以上の二本柱の上に立つて、まず賃上問題は山を一月下旬から二月を予想し四万労働者の要求を集約総評のヤマに持込み、とくに一番苦しい層の人たちの要求をとり上げ、われわれの戦列に加えるためすべての闘いの統一目標を最低賃金八千円の法制化におき、地域でも産業別でも最低賃金制の要求を起すことになつた。

職場闘争を根底に

総評の両の拠点と呼ばれる大地評今年の行動方針は全国の労使の関心を持つて見守られているが、今年の行動方針の中心は生産性向上運動反対と最低賃金八千円獲得の二本の柱がバツクボーンとなつている。

具体的な闘い方としては職場の隅々から闘いをもり上げ、職場に根を下した闘いから発展させることになつた。

中小の合同労組を

中小企業の組織化＝この一年間に加盟十二単産、百六十名が新しく組織された。これを一本にして中小企業労働組合協議会に発展させる、それとともに独立して組合をつくり得ないものは個人加盟の合同労組を大地評に本に結成して拡大をはかる。

これとともに農、商との提携も昨年以上に促進しとくに農村出身の運動者の組織活動による労農共闘の場は広い面をもつているので、この運営には他に勝る精力を傾注する。

などの行動方針に対する主な意見として

○もう少し生産性向上運動反対を具体的にうち出し、この運動に対して思想的な攻撃が明確にうち出されていない。

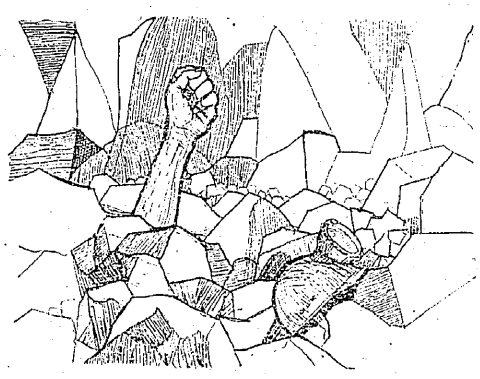
○大地評闘争態勢強化については

会長川口六平（東圧）副会長杉野一幹（三鉱）浦正武（国鉄）事務局長鴻田移（三鉱）次長中山孝憲（東圧）監事松葉幹生（三職）島村三喜男（自労）

創作　入選三席

一人の鉱夫（四）

前田風太郎作
久慈悠一画



昼の休みは終つた。鉱夫達はこれから昼坑まぎわの時間が来るまで又一生懸命働かねばならない。ねむたい目を懸命にさすりながら工具を手に取る鉱夫達の胸には親も捨つている妻子のことも浮ばなかつた。ただ従順的に働きに向う動物的な肉体による手足の無意識な行動だけがあつた。

廿八才の年齢を持つてもまだ妻を持たない草田の作業シャツは、手を動かす度に少しづつ破けて行つた。そんな時に、妹の恋愛にも一々口を出している自分の老い込んだ心の中を見出しては草田は天井に向つて意味のない笑いをもらした。その草田の頭の上には、彼を呑み込もうかともするかのような大きな岩の亀裂が、かあーつと口を開いていた。

突然、草田は今まで感じたことのない程の恐怖を感じた。手に持つている坑木が頼りない、ただ一つの木片に過ぎないような気がして来た。こんな大きな岩が幾つも幾つも、自分達が歩けば歩く所で、際限なく頭の上に乗つかつている。しかも、彼は急に君枝のことを思い出した。「行一さんのあらゆるものが好きだわ、私自身、行一さんなの」と叫んだ君枝のことが。彼自身に取つて最も愛しいもののように思われて来た、妹の事が。彼は行一に君枝をもらつてもらおうと決心した。行一だけは君枝が居る限り絶対に事故で死んだりはしないだろう。彼は思つた何故、俺は今まで行一を嫌つたんだろうか、然し今はもう分つた行一に取つてはこんな所でも、始終ぐらぐらしている無秩序な世界でも少しも恐怖は感じなかつたんだ、頼もしい奴だ、それに君枝が彼を愛しているのだ。

突然、三片全体をゆり動かすような振動が起つた。突風の中にかすかな悲鳴が聞えたようだつた。もうもうとたちこめる塵の闇の中を鉱夫達は懸命に走つて行つた。幾つもの血走つた目のそそがれる中に鮮かにも事故の現場が悪夢のように浮び上つて来た。手のつけようもない大きな岩の下敷きになつている草田の地下足袋が無造作に見られた。しかし、岩に向つて勢いよく最後まで突き出されたままの腕は痛しいことには鉱夫達の目にはふれなかつた。

（終）

はつきりした態度の表現が欲しい。例えば何々しましようということではいけない。何々せよという強い態度を出せ。

という声も出た。

新役員はつぎの通り